

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

地球の木20周年記念 連続講座がスタート

ネパールチーム 乳井京子

■サルバジットさんがやってきた！

会員の皆さまのご支援とご協力のおかげで、地球の木は今年20周年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。設立20周年記念事業として「分かち合うくらし」をテーマに3回の連続講座を企画していますが、第1回は「幸せ分かち合いムーブメント」のプログラム・コーディネーター、SAGUNのサルバジット・ラマさんを招聘する機会に恵まれました。愛知県でのリーダー研修に参加するためネパールから来日していたサルバジットさんに横浜まで足を延ばしてもらったのです。

サルバジットさん招聘の目的は、交流を通して会員の皆さまと「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトを共有すること、サルバジットさんに日本の現状を知っていただくことでした。10月15日の「ネパールの笛のコンサート&対談」では、笛の名手でもあるサルバジットさんと青年海外協力隊としてネパールで活動していた田中浩平さんの太鼓の演奏が来場者たちの心をほぐし、和やかな雰囲気の中で対談が始まりました。

■対談「幸せを分かち合う地域づくり」

サルバジットさんからはネパールで5年目を迎えた「幸せ分かち合いムーブメント」がいかに住民の意思を尊重して行われているかという事例が発表されました。対談相手であるNPO法人「懐かしい未来」代表の鎌田陽司さんからは、ネパールも日本も世界の各地域が行き過ぎたグローバリゼーションによって危機に瀕していること、それに対して地域の力を取り戻していくローカリゼーションの動きが起きていることが説明されました。また、ネパールでの平和教育の実践についての紹介がありました。お二人のお話から、現地の人々が主体となって地域をつくるためには教育が重要であり、従来とは異なる新たな教育のあり方が求められることが分かりました。

CONTENTS

- 地球の木20周年記念連続講座がスタート ……1
- 特集Laos ラオスの森林と農業プログラム ……2~3
- Nepal マンガルトール調査報告 ……4
- Cambodia 都市の学校と田舎の学校 ……5
- 国際理解講座「ナマステ！ネパール」 ……6
- 磯子フェスティバル報告 ……6
- よこはま国際フェスタ2011 ……6
- 「脱原発」持続可能な世界をめざして！！ ……7
- 東日本大震災復興支援報告 ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



演奏をするサルバジットさんと田中さん



対談をする鎌田さん

■「ないものねだり」ではなく 「あるものを探す」

サルバジットさんの6日間の滞在中、高校・高齢者施設・福祉関連グループなどへの訪問に同行して感心したことがあります。それは、サルバジットさんがどんなことも前向きに捉え、いつも「いいとこ探し」をして、「学ぶ」という姿勢に徹しているということでした。きっとマンガルトール村でも同じように真摯な態度で村人たちと向き合い、ユーモアと笑顔で村人たちのよい所を引出し、村人たちから学ぶという姿勢でプログラムに取り組んでいるのでしょう。

■外部者として寄り添う支援

村人たちが膝を突き合わせて地域の課題を話し合い、解決していく、それを私たち外部者（地球の木とSAGUN）は、温かく見守り、励ましながら側面から支援していく。9月の現地調査で強く感じたことは、これまでに地球の木とSAGUNのメンバーたちが幾度となく、山を越え谷を渡って点在する村々を訪問し、村人たちと温かい信頼関係を築いてきたということでした。「幸せ分かち合いムーブメント」は今年で5年目、来年は評価の年です。開発のモデルとなるような、真に住民主体のプログラムを村人と共に創っていききたいと思います。

連続講座の第2回、第3回の詳細はP8をご覧ください。

特集

Laos ラオスの森林と 農業プログラム



森で採れた木の実や山菜を売る女性

今ラオスで起きていることは・・・

ラオスは森林をはじめとする豊かな自然資源を有する国です。人口の約8割が農村に住み、米と野菜を作り、その他きのこや木の実、小動物などの食材、薬草、建材など必要なものは森の恵みから得て、あまりお金のいらぬ自給自足に近い生活をしてきました。人びとのこういってくらは、経済活動を伴わないのでGDPという数字を上げることは役立たず、ラオスは最貧国となっています。

ラオス政府は2020年までに最貧国からの脱却を目指して、巨大ダムを作って近隣国に電力を販売したり、森林を切り開いて外国企業のゴムやユーカリのプランテーションを誘致したり、さらに工業団地の造成等、大規模な経済開発に力を注いでいます。特にJVCの活動対象地域であるサワナケート県は中央にタイとベトナムを結ぶ東西回廊（国道9号線）が通り、さらに海外企業による開発が拡大しています。

しかしこれらの開発は必ずしも村びとたちの暮らしを豊かにしません。それどころか村人が伝統的に守りながら利用してきた森が、十分な補償も無いまま奪われ、食料や収入源を森から得て生活してきた人々は、今までの暮らしが成り立たなくなってきました。

そのような背景のなか、JVCはその地に生きる人々が、地域の資源や知恵を活かして暮らしを改善できるよう様々な活動を展開しています。

地球の木では、このサワナケート県でのJVCの活動を「応援団として」支えています。



米銀行

ラオス雑感～悩みながら～

私たちラオスチームはラオスの村を支援しているのだろうか？ JVCのように駐在できない私たちにできることはなんだろうか？ できるだけラオス学習会、内外のラオス報告、調査旅行に出かけ、ラオスの村の家、田んぼ、畑、森、川を見、村のくらし、経済その変化を聞き、JVCの考え方、やり方からほんとはたくさんの事を学んできました。そして私たちの大切な役割はそれを日本で伝えることだろうと思いました。

便利で快適な、しかしなんと危ういということが証明されてしまった私たちの暮らしや将来のことを、今、立ち止まって、みんなで考えなくては、日本の中学生を前になかなかうまく伝わらないことにある気持をおさえつつ、話してきました。いつももっと説得力があれば、ことばに力が欲しいと思います。それは、直にラオスのくらしを感じたり触れたりして、考えることで得られるのではないか、そのための何か手立てはないだろうか。



もし私たちが子牛（ホルスタインじゃありません。ラオスの水牛です）を1頭所有したとします。それを村に駐在させ、何を食べ、どんな病気をし、どんなに大きくなり、そしてどんな仕事をし、どんなふう死にぬのか、私たちの牛が村で暮らし、村の人と共に働き一生を終える、ちょっとときどきします。あるいは平均的なラオス人の一家と知り合いになります。その家族の出来事、喜びや悲しみ子ども達の成長を見届けていたらどうだろうか。私たちにそれは少しラオスに近づくことにならない？

伝えたいことは、ラオス人の暮らしの中に見られるしなやかさ（私たちもかつてそうだったとくすかに思い出します）、その自然の深謀さに頭を下げ、生物、しくみの多様性と共に生きることなのですか・・・。（ラオスチーム 久保田 由紀子）

森林を保全し村人の暮らしを守るために、JVCが行っていること・・・

<森林保全活動>

2010年にラオス政府により策定された新しい参加型土地利用計画（PLUP）では、村人が慣習的に利用してきた森林を「村の共有林」として正式に登録できるようになりました。JVCはこの正式登録に向けて、まずは村人に森や土地に対する法律や権利を知ってもらう研修や、学校での環境教育、村の森林ボランティアの育成などを行っています。

この共有林登録をすることにより村人の利用権が法的に認められ、村人たちが自身が主張できるようになり、開発のために不当に企業などに売られてしまうことを防ぎます。

<持続的農業を通じた生活改善活動>

また、農業の改善を通してより安定した暮らしが出来るように支援を行っています。

村人たちは洪水や雨不足など天候不順によるリスクを軽減するため、伝統的に様々な知恵を使って今でも米作りを行ってききましたが、1年分の十分な量の米の生産までにはいきません。化学肥料が奨励されている中で、いかに持続的で、お金のかからない、安全なやり方で米の収量を増やしていくか、その技術を村人と共に考えながら進んでいます。具体的には、幼苗一本植え技術研修や有機肥料研修などや米が不足する家庭のための米銀行の設置、井戸の補修技術の研修などを行っています。

（ラオスチーム 中野 真理子）

日本のアジア学院に留学していたフンパンさんが、ラオスの村での実践を報告してくれます。2009年地球の木はフンパンさんの学費を支援しました。

フンパンさんの現地実践報告

地球の木の会員の皆様、お元気でしょうか。JVCラオス事務所のフンパンです。アジア学院での研修を終え、ラオスに戻りすでに2年の月日が経ちましたが、たくさんの学びの機会を得た日本での生活を今でも忘れることができません。

9ヵ月間にわたるプログラムを通じて、アジア学院では様々なことを学びました。それらの技術の中には、現在のラオスではそのままでは活用できないものも少なくはありません。しかしそのような技術でも、少し工夫することによって有効に活用できるものが多々あります。また、現在の環境では有効ではないにしても、将来のラオスに必要なだろうと考えられる技術もあります。

今回は、現在私が取り組んでいる活動について、述べさせていただきます。



1. 合鴨農法（アヒル稲作）

アサボン郡のケンメオ村で農業を営むヴィエンさんと、彼の田んぼに「合鴨農法」を試験的に導入してみました。ヴィエンさんは「アヒルを田んぼに放した後、土壌が良く（柔らかく）なり、雑草も減った。また、アヒルの餌代を節約できる上、害虫の駆除もアヒルがしてくれる」と「合鴨農法」の技術を高く評価しています。「合鴨農法」は、貧困に悩む活動地の農家に有益な技術ではありますが、アヒルの飼育に必要な水を田んぼに確保できない状況では実施ができません。



合鴨農法に取り組んだヴィエンさん

* 2. ポカシ肥と液肥

最近になって、様々な種類の化学肥料が中国をはじめとした外国からラオスに入るようになりました。化学肥料は購入にお金がかかるだけではなく、土地を劣化させる場合もあるので、私たちは化学肥料を農家が使うことを推奨していません。その点、ポカシ肥は環境に優しく、自分たちで作ることが可能で大きな出費が伴いません。



自分の経験を他の村びとに伝えるシヴァンさん

同じくアジア学院で学んだ液肥も環境に優しい肥料ですが、村人にとっては原料となる砂糖を購入することが負担になるようです。ピン郡サナミサイ村のシヴァンさんは「長年化学肥料を使ってそこそこ良い収穫を得てはきたが、実は支出も多く悩んでいた。来年はポカシ肥に変える」と話しています。

しかし、ポカシ肥は新しい技術であり、家畜の

糞を入手困難な村人が多く、作るには手間がかかるなど問題があります。このような問題を解決するために、ポカシ肥を貸し出すために各村に「ポカシ肥銀行」を設立してみようかと私は考えています。

*ポカシ肥は、有機肥料を醗酵させたもので土壌を改良する効果がある



ナハンノイ村で行われたポカシ肥研修

3. 伝統種の保存

ラオスの伝統的な種は、海外から導入された種に駆逐されつつあります。そこで、伝統種での稲作を促進するため、昨年「種銀行」を試験的に導入しました。

4. ビニールハウスを使った苗床

今年の乾季稲作では、ハウスを使った苗床を活動地の3カ所で試験的に導入しました。良かった点としては、苗の成長が早かった上、田んぼへの移植が容易にでき、苗の移植の後にこのハウスを野菜栽培に転用できたことです。ただし、ハウスの使用自体が村人にとって初めてであったこともあり、ハウスを密封したために苗が死んでしまったり、苗床に種を蒔きすぎたことが原因で強い苗が育たなかったりという問題も露見しました。

（翻訳：JVCラオス担当 島村昌浩さん）



村内に設置されたビニールハウス

9月20日から27日まで、ネパールチームの乳井さんとマンガルタール村を訪れました。今回は2つのことに焦点を当てました。ひとつは、今年で5年目になるプログラムがどのような成果を生んでいて、今後どのように発展していくのか。もうひとつは、村の人たちのことを「調べる」という形ではなく、友人として接し、暮らしの中の喜びや苦しみを共有することで。今回はネパール語=日本語通訳のミナさんが同行してくれたおかげで、女性たちのさまざまな声を聞くことができました。

地元の先生になった奨学生

訪れたのは、昨年度収入創出プログラムが始まったパンンチェ地区と、新しい図書室設置を希望しているラジャバス地区でした。山道を登ってパンンチェにある小学校に着くと、見覚えのある、笑顔のすてきな若い女性がいました。ジャナクマヤさん、2008年度の奨学生でした。卒業後勉強を続け、結婚し、今年の春から働き始めたということです。赤ちゃんをおんぶしながら教えていました。

2010年度までに奨学金プログラムに参加した生徒は37人。卒業生の多くが働きながら勉強を続け、教師を目指しています。奨学金は村にいながらにして学問を続けられる貴重な制度で、下の学年の生徒が希望を持って勉強を続ける動機づけとなっています。



小学校で教える元奨学生のジャナクマヤさん

収入創出プログラムは女性たちを活発に

収入創出プログラムとは、農民に5,000ネパールルピー（約5,000円）を無利子で融資し、種など必要なものを購入して野菜またはかごを作り、市場で売って現金収入を得るというものです。収益は子どもたちの教育費などに使われています。2グループ合わせて21人がすでに資金を返還し、次の各グループに手渡しました。現在29人がこのプログラムに加わっています。

パンンチェ地区の新しい参加者10人のうち、6名に会うことができました。農地の状況や働き手の人数により、成果は様々です。プタリさんは40歳の未亡人。最初は緊張して暗い顔だったのが、家族や暮らしのことなどをいろいろと話した後は笑顔になりました。きゅうり、かぼちゃ、カリフラワーなど、少し市場で売ることができたそうです。野菜栽培に関してもっと情報がほしいと言っていました。

いっぽう、25歳のサンギータさんは、行政が実施した3日間の農業トレーニングに区代表として参加。化学肥料を使わない農法や害虫対策、ビニールハウスの作り方などを学んで、張り切っていました。畑で採れるトウモロコシは5~6ヵ月分のみ。じゃがいもやきゅうりを作り、週3回は山を下りて町まで売りに行っています。

グナマヤさんは43歳。5歳から21歳の子どもが8人います。植えた野菜が雨で腐り、家族の分しか採れなかったそうです。大きな子どもはカトマンズに働きに行っており、もうすぐネパールで一番大きな祭りが来るので、豚だけは一匹準備してあるとうれしそうです。手伝ってくれるのは家にいる子どもたちです。

どの人にも共通していたことは、プログラムに参加する前は市場に売りに行ったことがなかったことでした。当然仕事量が増え、たいへんなのではないかと思います。どの農民も、参加することで意欲が高まり、生き生きとしていました。もうひとつ特徴的だったのは、女性が多かったこと。識字教室により識字者が増えたこともあり、女性の社会参加に道が開けた様子がうかがえました。

ネパール マンガルタール調査報告

小さなプログラムが大きなムーブメントに



学校が終わったら家の仕事

山の自給自足の暮らし

山の中腹にあるため、ほとんどの畑が急斜面にあり、作業がたいへんなことに加え、保水力も少ないことが問題です。泊まらせてもらったモナクマリさんの家族を見て、自給自足の生活の豊かさと厳しさの両方を感じることができました。すぐ目の前の畑から採れるトウモロコシや豆、きゅうりはとても新鮮でおいしいです。必要なものはほとんど畑で採れ、足りないのは塩と香辛料とお米のみでした。しかし、主食ひとつとっても、自給自足の生活はたいへんです。トウモロコシを植え、収穫し、干して保存。それから実をばらし、粉引き所で粉にし、鍋で水と混ぜてかき回してディロという主食を作ります。時間がない時はお総菜を買って帰る私にとって、ごはんを食べるのにこれだけの作業をすべてしなくてはならない生活に、たいへん厳しいものを感じました。

図書委員会

村2日目の朝はもう少し山を登ったところにあるラジャバス地区へ。学校に着くと、昨年会った先生たちが迎えてくれました。図書室がほしいという村人の声に対し、SAGUNが、委員会を結成し、場所を確保したら図書は協力するという返事をしたのが1年前。教師と保護者からなる図書委員会がすでに結成され、小さな本棚の図書活動が始動していました。昼休み45分間に毎日20~30冊の本の貸し出しがあるそうです。先ず建物を建てるのではなく、先ず人が動く、これが大切だと実感しました。



山の上の学校にミニミニ図書室開設

これから

それぞれのプログラムは小さなものですが、村の生徒、農民、教師が主体となり大きな原動力となっていることが伝わってきました。人々の活動が活発になり、まさに「ムーブメント」を感じました。地球の木に対する感謝のことはたくさん聞きました。5年間のプログラムが終わってから、村の人たち・SAGUN・地球の木で各地域を回って参加型評価をすることになりました。その結果をもって今後を話し合っていく予定です。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

このプログラムは「かながわ民際協力基金」の助成を受けています。

クメールシルクプログラム

カンボジアでも今年の雨期は豪雨が多く、9月には、シェムリアップ州やコンポントム州など多くの地域で大きな被害を受けました。2011年11月4日「Koh Santepheap」という新聞によると、死者は250人にのぼり、被災者は150万人を超えたそうです。洪水の被害を受けていないプノンペンやタケオなどの地域でも米の値上がりなど影響が出ています。

連絡係のタリーさんが8月末にタケオのセンターを訪問しました。少女たちの要望を受け、9月からの新学期のために地球の木からのノートを配りました。農村では、雨季の間、少女たちも農作業の手伝いをします。センターでのショールの製作も少しゆっくりとしたペースになっているようです。タリーさんからカンボジアの学校についてのレポートが届いています。

都市の学校と田舎の学校

クメールシルク連絡係 ハイ・タリー

カンボジアの教育制度は日本の教育制度と同じです。小学校は6年間で、中学校は3年間で、高校は3年間です。最初の9年間は義務教育です。義務教育とは親たちが子どもを学校へ行かせなければならないことです。しかし、カンボジアでは義務教育といっても、貧乏な生活で親たちは学校に子どもを行かせない場合もあります。家族の生活を支えるために、子どもを学校に行かせずに、家の手伝いをさせたり、アルバイトや、田んぼをしたりさせます。

生徒の人数が毎年だんだん多くなったのがきっかけで、都市にある多くの小・中・高校では、教室や教師が足りません。それで、都市にある学校の授業は午前と午後の2部制に分けられます。午前の授業は7時から11時までで、午後の授業は1時から5時までです。生徒は空いた時間、プライベート・スクールで英語やコンピュータや数学や文学などを勉強します。

ところが、田舎にある多くの小・中・高校で授業は午前の1部制に決まっています。中学3年生(第9学年)と高校3年生(第12学年)には、卒業試験がありますから、午前の授業と午後の授業をとっています。それ以外の学年は授業の科目が少ないし、都市の生徒の人数と比べると田舎の生徒はまだ少ないので、午前の授業だけとっています。タケオ州の職業訓練センターの近くにあるブンラニーフンセンブノムチソウという学校でも、中学校3年生と高校3年生は午前と午後の授業をとっています。そして、空いた時間は卒業試験のために塾に通っています。カンボジアの学校は9月の下旬に始まり、6月の下旬に終わります。(原文のまま)



染色のための道具をマーケットで買っているタリーさん(左)

イベントの秋



国際理解講座「ナマステ!ネパール」
(9/30 茅ヶ崎市香川公民館主催)

普段、中高生を相手に行うことが多い出前講座であるが、今回は公民館主催の一般の方を対象にした企画で、14名の比較的シニア層の方たちが参加された。

ファシリテーターは乳井さん。字が読めないとは実際どうということなのか、「毒のコップ」で体験してもらい、識字教室を始めたことでどのような成果があったのか紙芝居「デブラニ物語」をする。

その後写真を見せながら、教育の重要性、村人主体の参加型の開発など、地球の木の支援や成果について想いのこもった丁寧な説明がなされた。参加者の共感や賛同を得られたとアンケートからもうかがえる。「もっと若い人たちにも聞いてほしかった」「開発とは幸せを分かち合うことという言葉が心にしみました」などの感想も寄せられた。また、ネパールという国に関心のある参加者には、多角的にネパールの状況を知らせる必要もあると思った。今後も多様な層に向けて大いに地球の木を発信していきたい。

(出前講座チーム 中野 真理子)



磯子フェスティバル報告

10月8日(土)磯子区役所で、「第9回いそご国際交流フェスティバル」が開催されました。

内容は盛り沢山で、外では高校の空手・フラダンスなど六団体が演技しました。また中では外国の写真コンテストや“お隣の外国人”というタイトルのパネルトーク、そして磯子工業高校のロボットやエコそり作りなど楽しい催しが目白押しでした。私たち地球の木なんぶは、毎年恒例のチャパティカレーとチャイで出店しました。

チャパティは、インドの全粒粉で作る、丸いパンのようなもので、ドライカレーを挟んで食べます。チャイはカルダモン入りの香りのよいミルクティーで、よく売れました。久しぶりに集まったなんぶの仲間たちが和気あいあいとチャパティやカレー作りを腕を振っていました。

2002年、サッカーの世界カップに出るブラジルチームが磯子にきたのをきっかけに始まった「いそご国際交流フェスティバル」も来年で10年目を迎えます。交流の輪をつないでいきたいと思えます。

磯子区近辺に住む会員の皆さま、来年はぜひご参加ください。ボランティアも大歓迎です。

(なんぶランチ 植 圭子)

よこはま国際フェスタ2011



今年は、大雨注意報が出た1日目は中止となり、10月23日(日)だけの開催となりましたが、幸い暖かな陽気となり、たくさんの人出で賑わいました。会場の「象の鼻パーク」は赤煉瓦倉庫から大棧橋・山下公園へと続く散策ルートにあり、港に臨む公園は雰囲気も最高です。地球の木のブースには、県内の大学で国際協力論を勉強し

ている学生さんたちも訪れ、地球の木の活動や「マジカルバナナ」の説明を熱心に聞いたり、鋭い質問をしてくださいました。お祭りではありますが、地球の木の活動をPRしたり、国際協力やグローバルな問題について人々と話したりする、またとない機会です。フェスタに参加する意味を再確認できるひとときでした。

また、このフェスタの中には子どもたちの参加イベントがあります。子どもたちが会場内でボランティア活動をして、働いた分だけ特別な「通貨」に替え、それで駄菓子類を購入できる仕組みです。子どもたちは、たしかに一生懸命仕事(ボランティア活動)をするのですが、私たち出店団体は、彼らのために仕事を作ってあげなければなりません。「ボランティアをされる側」の立場に立たされるのです。「ボランティアをする側」に立つことの多い私たちが見落としがちな視点です。私たちが海外支援や被災地支援を言う時に、本当に相手の立場に立っているか、あらためてそんなことも考えさせられた今年のフェスタでした。

(副理事長 斎藤 聖)

脱原発

持続可能な世界をめざして!!

3.11の巨大地震・津波・福島原子力発電所の事故による広範囲に及ぶ影響は、私たちの社会に大きな転換を迫るものとなりました。原発に関しては、都市と地方の関係や、後世にも大きな影響を及ぼす危機と隣り合わせの現代社会の数々の問題点が一気に浮かび上がってきました。地球の木は、世界の不正を私たちの暮らしとの関係から捉え、「生活を見直そう」と活動してきましたが、国内にも同様の構造があることを強く実感しました。これまで再生可能なエネルギーについて、六ヶ所村とそこに住む人々について学習してきたにも関わらず、社会を変えていく運動につながらなかったことが悔やまれてなりません。

地球の木は、これからも原子力発電に反対の立場を取って

いきます。また、日本だけでなく、海外に原発を輸出することにも反対します。

原子力発電そのものの是非だけでなく、どの地域の人たちにも公平に、そして後々の世代の人たちにもこの地球を分かち合うことのできる、持続可能な世界の実現のためには、天然資源全体について考え、私たちのライフスタイルのあり方、オルタナティブな経済の探求をも視野に入れてグローバルに、総合的に議論していきたいと考えています。

20周年記念事業にもこのような議論の場を作っていきますので、皆さまの積極的なご参加とご意見をどうぞよろしくお願いいたします。(理事長 丸谷 士都子)



東日本大震災復興支援報告

この「縁」を大切に!

9月7~9日、東日本大震災発生から半年。次の段階の支援に向けて、現地の詳しい状況を調査するために気仙沼を訪れました。

一関から気仙沼に向かう道でも、もはや物々しい自衛隊の車列を見ることはありません(自衛隊は7月末で撤退)。仮設住宅の建設も進み、人々は避難所から仮設住宅に移っています。街を見渡すと学校のグラウンドや公園、公共施設の庭などには、ほとんど仮設住宅が建っています。私たちが支援しているIVY気仙沼の事務所がある田中前2丁目地域でも、泥出しなどの復旧作業は完全に終わり、商業施設も順調に回復しています。この辺りも1メートルもの浸水被害を受けたことなど、言われなければわからないでしょう。しかし、気仙沼全体を見てみれば、壊滅的な被害にあった地域は、依然として、手つかずのまま放置されています。港が再開されたというけれど、地盤が沈下し、付近は潮位によって今でも浸水するといった状況が続いています。気仙沼の街を支える魚市場や水産加工の工場などは、全体的に約2割程度が復興しているようですが、「2割復興したと言っても、これがあと半年で4割、そして8

割というふうに順調に復興していくとは決して思えない……港と水産加工の工場が復興しない限り気仙沼の復興はないのに」とIVY気仙沼の高藤さんは話しています。現地に明るい展望が見えるのはいつのことでしょうか。

IVY気仙沼では、現在、キャッシュフオーワークのプログラムで、泥出しや給食の配食サービス、仮設住宅での朝市やお年寄りが孤独にならないための「お茶飲み会」などをおこなっています。彼らが一番心配しているのは、仮設住宅に入り目が行き届かなくなるお年寄りたち。IVY気仙沼の有志メンバーは、次のステップとして、お年寄りのためのデイサービスや地域の子どもたちのために活動する法人を立ちあげようとして準備しています。地球の木も、会員の行政書士の方にご協力いただき、NPO法人化手続き等の相談に乗っています。「震災がなかったら地球の木の人たちに出会うこともなかった……」と話す彼ら。この「縁」を大切に、地元の気仙沼を愛し、地元のためにがんばっている彼らの次のステップを応援していきます。(事務局長 筒井 由紀子)

活動日誌(9月~11月抜粋)

9月 3日	横浜下町パラダイスマつり・よこはま若葉町多文化映画祭 (シネマ ジャック&ベティ)	23日	よこはま国際フェスタ2011参加(象の鼻パーク)
8日	第4回ランチ連絡会 ワークショップ「援助する前に考えよう」	28日	上半期監査
15日	第5回理事会	29日	フォーラムアソシエ文化祭参加
17日	IVY気仙沼現地報告会参加	30~11/6	ネパール現地訪問
	ネパールスタディツアー2011秋説明会	31~11/1	孝道山「大黒まつり」ちぢみ販売で参加
19~28日	ネパール調査	11月	
24日	平塚市民活動センターまつり参加(西湘ランチ)	1~2日	デポー販売(東寺尾デポー)
26日	ラオス現地スタッフ・グレンさん報告会(事務所)	6日	鎌倉国際交流フェスティバル(三浦ランチ・高徳院)
30日	国際理解講座「ナマステ!ネパール」(茅ヶ崎市香川公民館)	8日	第7回理事会
10月		10日	あーすフェスタかながわ2011実行委員会(あーすぶらざ)
1~2日	グローバルフェスタJAPAN2011参加(日比谷公園)	14日	第2回三カ年計画策定委員会、ラオスチーム学習会
3日	第5回ランチ連絡会 第5回20周年記念事業実行委員会	17日	第6回20周年記念事業実行委員会/第6回ランチ連絡会
6日	第6回理事会	19日	オルタナティブフェスタ
8日	磯子国際交流フェスティバル(なんぶランチ・磯子区役所)		ワークショップ「援助する前に考えよう」(平塚市共催)
11~16日	ネパール・サルバジットさん神奈川滞在	21日	第3回プログラム連絡会
15日	20周年記念連続講座第1回「ネパールの笛のコンサート&対談」	21~22日	デポー販売(はしどデポー)
18日	第2回プログラム連絡会	24日	生活クラブ生協神奈川40周年・デポー30周年記念講演会・レセプション参加
19日	第1回三カ年計画策定委員会	27日	あーすフェスタかながわ2011参加(あーすプラザ)
		30~12/1	デポー販売(センター南デポー)

*各チームミーティングが毎月行われています。

地球の木の「ホームページ」リニューアルのお知らせ

地球の木の「ホームページ」が生まれ変わりました！今までにも増して、地球の木が丸ごとわかります！

「クレジットカードでの寄付」も可能になり、「入会申し込み」「地球の木主催のイベント参加申し込み」「ボランティア登録」「カレンダーなどの購入・申込み」「メールマガジン登録」も当ホームページから直接簡単にできるようになりました。

ぜひアクセスして、新しくなった地球の木の「ホームページ」を大いに活用して下さい。

(アドレスは今まで同様 <http://e-tree.jp/>)



地球の木20周年記念 連続講座

第2回トークイベント

いきいきと生きるための「経済」



効率を求めてきた経済が今、危機に瀕しています。そのような中、生き生きと暮らすことのできる「もうひとつの経済のあり方」について紹介します。

講師：内田 聖子さん

(NPO法人アジア太平洋資料センター事務局長)

日時：12月10日(土) 13:30~16:00

場所：開港記念会館(JR「関内駅」徒歩7分、みなとみらい線「日本大通り駅」徒歩1分)

地球の木20周年記念 連続講座

第3回トークイベント&パーティ

飯館村から考える地産地消のエネルギーと原発

再生可能なエネルギーによる村づくりを進めてきた飯館村が原子力発電所事故による災害に遭いました。エネルギーと暮らしについて、参加者とともに探ります。



講師：大嶋 朝香さん(NPO法人ひらつかエネルギーカフェ代表)

浦上 健司さん(飯館村後方支援チーム、日本大学生物資源科学部研究員)

日時：2月4日(土)

・トーク 13:30~16:00 (参加費500円)

・パーティ 16:30~18:00 (参加費1,500円)

場所：オルタナティブ生活館

(JR/横浜市営地下鉄「新横浜」徒歩7分)

年末募金にご協力をお願いいたします

ラオス：村びと募金

ネパール：村びとに届けよう、元気募金

カンボジア：夢織りサポート募金

※年末募金は、地球の木の海外支援プログラムに使われます。

地球の木カレンダー2012「いのちの輝き」



カレンダーの準備はお済みですか？

女性カメラマン松尾純さんの撮ったラダックの女の子の表紙が新年の華やかさを感じさせます。

一部1,500円(送料；神奈川県内一部340円)

お申込み・問合せは、地球の木事務局

※FAX、電話、メール、ホームページでも受け付けております。

※カレンダーの収益は支援地の援助に使われます。

よこはま国際フォーラム2012

地球の木は「援助する前に考えよう」のワークショップを行います。

日時：2012年2月11日(土) 12日(日)

11:00~17:00

会場：JICA横浜(みなとみらい線「馬車道駅」徒歩10分)

JR/横浜市営地下鉄「桜木町駅」徒歩15分)

お申込み・問合せ：

よこはま国際フォーラム2012プロジェクト事務局

■Tel 045-662-6350 ■E-mail info@yokohama-c-plat.org

ご寄付の領収書について

今年も、ご寄付や会費で沢山のご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

年末募金を含め、2011年の年末までにいただいたご寄付の領収書で未発行のものは、2012年の1月末までに、順次、郵送するように予定しております。

なお、サポート会員会費の領収書は希望者にものみ発行しております。領収書が必要な方は、事務局までご連絡ください。領収書の発行には、1週間程度の期間をいただいております。どうぞ、余裕をもって、ご連絡ください。寄付金控除の申告は確定申告で行います。ご予約のある方は、忘れないようにお手続きください。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。